

道南回顧  
2011

④

「最後の乗組員にあえてお礼を言いたい。彼らのおかげで私たちはここに集まることができたのだから」

オランダ、横須賀市、香川県塩飽諸島、木古内町…。一見無関係なこれらの地域を、1隻の船が結びつけた。幕末に日本初の太平洋横断を成し遂げた軍艦「咸臨丸」だ。

9月末、全国のゆかりの地の関係者を集めた初の「咸臨丸全国まちづくりサミット」が木古内町で開かれた。初日の記念式典ではオランダ大使館のパス・バルクス報道文化補佐官があいさつに立ち、冒頭の言葉でサミットの幕が上がった。

同町は1871年(明治4年)に咸臨丸が座礁沈没した「最期の地」。江戸幕府の発注でオラン

## 咸臨丸全国まちづくりサミット

ダで建造され、勝海舟らに乗せて太平洋を往復。維新後は北海道に移民を運ぶ輸送船として最期を迎えた。式典会場となった座礁の地、サラキ岬には全国10カ所以上から約250人が詰めかけた。

町中央公民館で開かれた討論会にはオランダや国内5地域の代表者ら15人が参加。最も盛り上がったのは終盤、サラキ岬沖に今も沈んでいるといわれる咸臨丸の遺物に話題が及んだ時だった。

サミットを主催した「咸臨丸とサラキ岬に夢みる会」の舩野信夫副会



咸臨丸の模型を囲んだ討論会で、海底調査の夢を語る白石市の風間康静市長(左手前)

## 「最期の地」で夢を共有

長が「沈没前に荷物を陸揚げしたと言われているが、食器や金属の釜は沈んだままではないか。それを掘り起こすのが大きな夢」と発言。最後の乗組員の故郷・宮城県白石市の風間康静市長は「家紋の一つでも見つかれば、私たちにとってはお宝。ぜひそういう夢を見ましよう」と語り、会場を沸かせた。

2日目は町民有志が咸臨丸の歴史を描いた朗読劇を披露。迫真の演技に、観客は立ち上がって拍手を送り、監督を務めた同会の多田賢淳事務局長はフィナーレで「仲間たちにお礼を言いたい」と声を詰まらせた。

同町が咸臨丸を核とした「観光ビジョン」を策定してから18年。町の事業が財政難で進まない中、ボランティアで同岬の公園化に取り組んできた町民有志にとってサミットは活動の集大成だ。

一方で、他地域を巻き込んだ新たな展開のスタートでもある。サミット終盤では参加地域が協力してまちづくりに取り組む「共同宣言」を交わした。来年以降、この宣言を生かしてどのような連携事業ができるのか、注目していきたい。

(大城道雄)